

イエス・キリストはお話、特に譬話の名手。ルカの福音書 15 章には、その中でも有名な「迷える一匹の羊」の物語があります。ストーリーは明快。ある羊飼いが大切に飼っていた百匹の羊のうち、一匹が迷子になってしまい、それを羊飼いが熱心に探し出すと、大喜びするというストーリーでした。

まず「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくした」（15：4）と、言われます。一体なぜ、この一匹の羊は迷ったのか。目的や計画があったから、とは考えられません。何故なら、羊は昔から無知で無能、愚か者の代名詞とされてきました。

「これをやってやろう」という才覚なく、「冒険してやろう」という勇気もなく、ただ目の前の草を追い、群れて動く。動いては食べ、食べては眠り、また食べては動くだけ。食欲と目先のことで日を送る。それが羊でした。恐らく、この一匹の羊も、目の前の草を夢中で食べているうちに、ふと気がついてみると、群れから離れてしまっていた、ということでしょう。

毎日、目先の事を追っているうちに、いつしか歩むべき道を見失い、迷ってしまう羊。一年365日、目先のことで食いつぶすだけの羊。しかし、振り返ると、私たちも、羊的人生を送ってはいなかったでしょうか。

食欲、金銭欲、名誉欲。目の前にぶらさがっている欲に飛びついているうちに、いつしか、人として生かされている尊さを忘れ、人生の目的を見失い、自分のような者を大切に思い、熱心に捜し求めてくれる救い主の愛をも知らずして、羊的人生を送って来なかったか。そんな事を考えさせられます。

しかし、迷える羊に自力救出は不可能。自分で帰るべき道をたどって、羊飼いの元に帰ることができない、無力な存在なのです。そんな羊に残されたただ一つの道。それは、鳴声をあげ、羊飼いを呼ぶことでした。

「イエス様、私は迷ってしまいました。助けてください。」と、羊飼いのイエス様を信頼して、呼ぶことです。そうすると、すぐにかけて抱いてくれるのが優しい羊飼いのイエス様でした。

「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」(15：7)

何度でも進むべき道を外れ、迷うこと多き私たち。そんな者を腕に抱いて、何度でも義の道に連れ戻し、励ましてくださるイエス様。「自分など生きていて何の意味があるだろう」と心寂しい時には、「あなたの存在がわたしにとって大きな喜びなのだ。わたしはあなたのために十字架に死んだのだよ。」と語りかけてくださるイエス様。このお方を羊飼いとして歩む人生、このお方と親しく交わる人生。これこそ、永遠の命の醍醐味なのです。

最後にふたつのことをお勧めします。ひとつは、すぐにイエス様から離れてしまう自分の弱さを自覚して、礼拝、みことば、祈り、兄弟姉妹との交わりを大切にすること。ふたつ目は、イエス様の愛で家族や隣人と接することです。

